

## サンタ電車で地域の子ども達とふれあい

12月19日(土)、三岐鉄道北勢線(西桑名～阿下喜間)にて、今年も、「サンタ電車」が運行された。これは、2010年に、四日市大学の「地方鉄道の意義」について考える講義を受けた総合政策学部の学生たちが、「将来の顧客となる子ども達に北勢線を親しんでもらおう」と、地域路線の北勢線を支援する目的で、三岐鉄道へ提案したことから始まったもので、総合政策学部の「鉄道とまちづくり」の授業の一環として、三岐鉄道の全面的な協力を受けて実現している人気のイベントである。今年は、学生や大学OBなど25名が携った。

クリスマスモードに装飾された車内で、サンタに扮した総合政策学部の学生が、子ども達にお菓子や風船をプレゼントした。西桑名駅では、沿線市町のご当地キャラクターが出迎えるなど、家族連れを中心に大いに賑わった。



## 東日本大震災支援の会の活動

12月11日(金)から13日(日)にかけて、宮城県東松島市と福島県葛尾村の支援活動を行った。四日市大学総合政策学部の学生が中心となって2011年4月に設立した「四日市東日本大震災支援の会」は、これまで、延べ1,200人ほどの三重県内外の大学生・高校生などのボランティア活動をコーディネートしてきており、今回の東北派遣で、第30回目となった。東松島市では、仮設住宅の住民の皆さんが企画したクリスマス・イルミネーション点灯式で、環境情報学部の学生たちによるライブの音響オペレーションとバンド演奏を行った。総合政策学部の学生は、活動全般のコーディネート、たこ焼き・ワッフル屋台の運営など、イベントを賑やかに演出。葛尾村では、原発の影響で全村避難中の皆さんが暮らす5か所の仮設住宅に分かれ、集会所で足浴&お茶会の交流会を開催した。今後も東北支援を継続し、三重の地域防災にも貢献していく。



## 「四日市祭 富士の巻き狩り」にボランティア参加

10月4日(日)、四日市大学の学生10名が、四日市市南浜田町の伝統祭である「富士の巻き狩り(市指定無形民俗文化財)」に参加した。これは、征夷大将軍源頼朝公が家来と共に猪を狩る、というストーリーを仮装行列で再現した、目にも鮮やかな練り行列だ。学生たちは、南浜田町の人々と共に、体長5メートルの大猪のハリボテに入って諏訪神社に演技を奉納、四日市のまちを盛り上げた。ハリボテとは言え、持ち上げるだけでも大変な重さの大猪を、たった2人が中に入って神社の境内を全速力で駆け回った。

今回の学生参加者は全員、野球部員ということで、直線を走る練習では余裕の様子であったが、境内を楕円型に走る本番では「やばい、(遠心力で)振られる」「怪我しないように気をつけないと」と、祭の激しさを実感したようだった。それでも「こういうことは初めてだけど、やってみると楽しい」と祭を楽しみながら参加してくれた。町の方にも子どもの頃からの知り合いのように接していただき、人との触れ合いや地域の温かさも感じる事ができたようだ。



これまでのPick Up Topicsは、ホームページでご覧いただけます。  
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/examinee/topic.html>

 文部科学省 **地(知)の拠点** Pick Up Topicsには、COC事業における記事が含まれています。

学校法人 暁学園 四日市大学

【発行】入試広報室

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

TEL:059-365-6711 FAX:059-325-7218

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

<http://smile.yokkaichi-u.ac.jp/> (受験生サイト)



P.1・大学地域貢献度ランキングで私立大学10位にランクイン  
・第2回「わかもの学会」実施

P.2・いなべ市北部集落で地域の方々への報告会を実施  
・ジョイントセミナーで準グランプリ受賞！  
・22世紀 奈佐の浜プロジェクトに参加

P.3・四日市公害と環境未来館との連携強化に向けて  
・第1回全国観光学専攻学生発表会を開催  
・太平洋セメント社を見学

P.4・サンタ電車で地域の子ども達とふれあい  
・東日本大震災支援の会の活動  
・「四日市祭 富士の巻き狩り」にボランティア参加

## 大学地域貢献度ランキングで私立大学10位にランクイン

日経グローバル(発行元:日本経済新聞社 産業地域研究所)が毎年実施している「大学の地域貢献度ランキング(※)」の2015年度評価で、四日市大学が国公立大学全国751校中、50位(私立大学370校の中では10位)にランクインした。これは、地(知)の拠点整備事業などの全学を挙げての取り組みが評価されたものと考えられる。これを励みに、四日市大学はさらに地域連携活動を深化させていくことが期待されている。

なお、総合ランキングの上位校は、1位:信州大学(国立)、2位:宇都宮大学(国立)、3位:兵庫県立大学(公立)、4位:群馬大学(国立)、5位:長崎大学(国立)であった。

(※)日経グローバルは、全国の大学を対象にアンケートを実施し、4分野の回答内容について採点したもの。回答した大学は523校。採点内容は、地域貢献の推進体制に関する「組織・制度」、地元就職や災害支援の実績に関する「学生・住民」、産学連携や大学発ベンチャーに関する「企業・行政」、留学生の就職支援や国際化の取り組みに関する「グローバル」の4分野である。

## 第2回「わかもの学会」実施

12月13日(日)、四日市大学にて、COC事業の一環でもある四日市大学の学生による研究発表や作品発表、地域活動報告に加え、地元高校生による発表、演劇、合唱を織り交ぜた内容で、全体で約200名が参加した。最初に、桑名西高校演劇部による「インターネットトラブルシュー」で幕開けし、生徒の皆さんが、大きな声と身振りで舞台狭しと激しく動き回り、スマートフォンの活用の危険性についての啓発劇を披露。

続いて、本学学生の活動報告に入り、古河拓実さん(経済学部3年)が「聖地巡礼と地域活性化」を、室田直哉さん(総合政策4年)らが「地方におけるドローン活用」を発表。どちらの発表も三重県や北勢地域への応用を考慮した内容であった。また、環境情報学部からは、メディアと映像セミナーで制作した映像作品「あの頃の青空へ～四日市公害患者野田之一さんからのメッセージ～」と「三重国体のCM」が紹介された。

後半では、劉麗麗さん(経済学部3年)らが「こども四日市サポーターによる商店街活性化」を、伊藤寿信さん(環境情報学部2年)と永井雄大さん(環境情報学部2年)が「いなべ市北部での学生によるインターン活動」を発表した。各発表については、連携先の地域の方にご登壇いただき、活動の様子や成果などについて、それぞれコメントを頂戴した。COC事業により、学生たちの地域活動が徐々に活発化・本格化していることが、よくわかる内容であった。引き続き、伊勢志摩地区の高校生2組から、「東北交流ボランティア活動」や「東南海地震に備えた防災活動」などの防災関連の活動について発表があり、大学生にも負けない、立派で堂々とした発表を行った。

最後に、昨年度に引き続き暁高校合唱部が登場し、「愛の力で地域に元気を！」と題して、「群青」や「ありがとう」など5曲を披露し、会場は拍手で包まれた。四日市大学のCOC事業では、今後も、地域を支える人材育成を行っていく。





## いなべ市北部集落で地域の方々への報告会を実施

四日市大学のCOC事業の一環として、いなべ市と協力して取り組んでいる「グリーンツーリズムによる北勢地域の観光産業振興」でのこれまでの活動報告会が、11月21日(土)に藤原町(かなえ)にて行われた。報告会では、楽しく聞いていただくために、新たに脚本化した藤原町の歴史物語の朗読も行われた。脚本は美里けんじ氏が、朗読は、いずれも環境情報学部2年生の伊藤寿信さん、永井雄大さん、中川真優さんが担当。なお、学生たちは昨年9月初旬に県地区で滞在(地域インターンシップ)を経験したメンバーだ。

報告会は、プロジェクトの目的と経緯の説明、学生滞在の報告、歴史物語の朗読、地域資源の調査報告、自然資源のビデオ、電子地図とGT支援アプリの紹介、グリーンツーリズムによる地域活性化への提言と進んだ。

その後の意見交換会では、地域の方々から、「大きな提案も理解できるが、まずは身近なことから始めるのが良いのではないか」「新たな地域産品として、りんごやぶどうの話もあったが、獣害が酷く、皆努力したが出来なかった過去がある」「獣害の対策を施した共同農場を市が用意してくれば、農業を行いたい気持はある」「県の土壌はすぐ下が粘土層や岩盤になっており、作物の生育には適していない」「春澄善繩(はるすみのよしただ)のことを歌った小学校の校歌の話題は、懐かしかったが、この校歌も間もなく失われてしまうのが残念だ」などの意見が挙がった。参加者の皆様には、本プロジェクトを理解いただき、地域の方々の意見を聞く良い機会となった。今後も地域の方々と連携しながら、活動を進めていく。なお、この報告会の様子は11月23日(月)にケーブルテレビ局CTYの「ケーブルNews」にて放送された。

## ジョイントセミナーで準グランプリ受賞！

12月4日(金)から6日(日)の3日間、四日市大学の岩崎恭典・小林慶太郎ゼミ(総合政策学部)と、早稲田大学や法政大学・宇都宮大学・中央学院大学の各大学の地方行政などについて学んでいるゼミとの恒例の合同研究発表合宿「ジョイントセミナー」が、千葉県館山市にて行われた。

各大学からは合計13本の研究発表があり、そのうち、「地域でのドローン(無人航空機)の活用」について扱った本学からの研究発表が、準グランプリを獲得した。本年は、合宿自体を運営する幹事校としての準備も並行しながらの参加となったが、例年と遜色ない発表をすることが出来た。



## 22世紀 奈佐の浜プロジェクトに参加

10月11日(日)、22世紀 奈佐の浜プロジェクト委員会主催による答志島・奈佐の浜の海岸清掃が実施され、三重・愛知・岐阜の3県から300名を超える参加者があり、四日市大学からは学生20名(環境情報学部19名、総合政策学部1名)と千葉賢教授(環境情報学部)が参加した。海岸に漂着するゴミの実態を知り、清掃活動に参加することは、自分達の生活の見直しや、地域の環境問題を知ることに繋がる。そこで、COC事業の一環として本学が行っている「地域環境の保全と環境教育の推進」の活動として参加を計画し、学生達に呼び掛け、多くの学生の参加へと繋がった。清掃活動後には学生交流会も行われ、四日市大学と、三重大学、岐阜大学、中部大学の合計で約70名の学生たちが、「奈佐の浜のゴミを100年後にゼロにするために」というテーマで話し合われた。

また、一般参加者の交流会では、千葉教授による伊勢湾の漂流漂着ゴミに関する研究の発表や、一般参加者同士の意見交換会も行われた。

奈佐の浜は、伊勢湾の中でゴミが最も漂着する海岸で、地元の漁業組合と共に同プロジェクトは4年前から清掃活動に取り組んでいる。このような大きな市民活動に、大学を飛び出して学生達が参加することは、社会の動き、社会を変えてゆく流れに触れることにもなり、学生たちの貴重な体験となった。



## 四日市公害と環境未来館との連携強化に向けて

11月7日(土)から8日(日)にかけ、総合政策学部の鬼頭浩文教授と神長唯准教授が、COC事業の一環として、新潟現地調査および富山での「学校」研究会へ出席し、研究報告を行った。今回の研究会には、環境情報学部の2年生が2名同行した。初日は、阿賀野川を実際に見学後、「新潟県立環境と人間のふれあい館～新潟水俣病資料館」を訪問。1995年にオープンした同館は、近々リニューアルを検討しており、2015年3月新たに開館したばかりの四日市公害と環境未来館と比較する意味で、塚田館長による解説付きで館内視察をさせていただくとともに関係者ヒアリングを実施した。

2日目は富山へ移動し、とやま健康パーク第1研修室で開かれた「学校」研究会に出席。「メイキング・オブ・教育実践」のセッションでは、公害教育を進める学校現場と公害資料館からの報告があった。新潟水俣病やイタイタイ病、四日市公害に関する授業を実践している小学校や高校からの報告に続き、「四日市大学における公害教育～四日市市との連携協定による協働の模索～」と題して、神長准教授が本学での取り組みについて報告。地域志向科目や、四日市市と本学が昨年、締結した公害資料館の活用に関する協定などが参加者の関心を集めた。最後に、約7Kmという本学と資料館との距離的な近さを活かすべく、公害資料館を地域の「学びの場」として、地元大学として今後ますます連携を深めていきたいと結んだ。

## 第1回全国観光学専攻学生発表会を開催

11月15日(日)、四日市大学にて第1回全国観光学専攻学生発表会を開催した。本学の友原ゼミ(総合政策学部)、和光大学(東京都)の長尾洋子ゼミ、四国学院大学(香川県)の杉山維彦ゼミ、長崎ウエスレヤン大学(長崎県)の加藤久雄ゼミから6組24名が参加し、15分間の口頭発表と10分間の質疑応答を行った。

友原ゼミでは、10月に、ゼミ生14名が岐阜県「さんまち」と呼ばれる飛騨高山歴史地区にて、若年女性観光者を対象にアンケート調査を実施している。これは近年、「女子旅」が注目されている中、飛騨高山を訪問している若年女性観光者にどのような特徴や傾向が見られるのかを明らかにするもので、2日間で計135名の観光者に協力していただいた。ゼミ生達から「(昨年度調査をした)伊勢では外国人観光者は少なかったのに、なぜここはこんなに多いのか」、「外国人は伊勢神宮という『点』としての観光資源よりも、古い町並みという『面』としての観光資源の方に惹かれるのだろうか」などといった「女子旅」調査以外の気付きもあり、友原ゼミは、その調査をまとめ、今回発表を行った。全国各地の観光学を専攻する学生達からも、様々な発表があり、「こういったテーマ、方法があるのか」、「他大学の観光学専攻学生もしっかり研究していて刺激を受けた」などといった声がかかれ、大変有意義な時間となった。今後は参加ゼミ数をもっと増やしてより一層意義深いものにしていきたい。



## 太平洋セメント社を見学

11月13日(金)、環境情報学部の武本ゼミの学生10名がいなべ市の太平洋セメント社藤原工場を見学した。国内最大級の規模であるこの施設では、各種セメントの焼成のほか、産業廃棄物の処理が行われている。見学に先立ち、講義室で事業概要の説明を受けた。藤原岳より採掘される良質の石灰岩が各種セメントの原料でリサイクル原料も約20%用いていること、燃料として石炭の他にリサイクル燃料も50%の比率で用いていることなどを学んだ。この工場では、1日8,300トン以上の原料を焼成しており、製品をトラックや三岐鉄道の貨車で四日市港から出荷している。関心が高まっている産業廃棄物や各種廃棄物の有効処理については、下水汚泥・都市ごみの焼却灰、廃プラ、廃タイヤ、碧南火力発電所からの石炭灰、廃油、廃酸、廃肉骨粉、自動車シュレッダーダストなどの処理といった取り組みを行っていることがわかった。なお、1,450℃の高温でセメントを焼成するので、ダイオキシン等はないとのことだ。参加した学生たちは、現実の廃棄物処理を学ぶ大変良い機会になったと感想を語った。